

報 告

宇部・山口・萩における史跡から得た問題関心

伊藤 陽寿*1

キーワード：大内氏の海外交易、墓石や碑文の年代、江戸時代における寺社の再興、
「萩八景」創出の意図、明治・大正期における史跡への「情」

1 はじめに

2016年8月28日から30日まで、至誠館大学萩本校への出張を兼ねての山口県内における史跡調査を行った。筆者の研究対象地域は琉球・沖縄であり、これまで山口県を対象地域とした研究を行ったことはない。しかし歴史学という視点のもとで、山口県の歴史から得た知見を琉球史研究に援用できないか、また海上交易などの点で山口、とりわけ萩と琉球を結びつけるための知見が得られないかというのが、昨年度本学の東京教室に着任してからの密かな願いであった。そこで今回、萩本校への出張という機会を利用させていただき、山口県内において予備調査を行った。

2 大内氏の海外交易

当初の目的は、琉球とも関係を構築していた^{参考文献1)}以下、参*と省略表記する。中世期の大名である大内氏が関係した禅寺を中心に廻るというものであった。中世期において大内氏は、時の室町幕府からも公認されたうえで、中国地方西部・九州北部を根拠地としつつ禅僧を介して中国の明や朝鮮に遣使し、莫大な富を築き上げていた。

大内氏が海外交易に従事する際に、是が非でも足がかりとしなければならなかった地は、交易に長けた商人や禅僧が集住する博多であった。なかでも博多聖福寺は、遣明船貿易を行なう際に大内氏が拠点とした寺である。15世紀半ばから16世紀の初頭にかけての時期に聖福寺と大内氏を取り持ったのが、筆者が最初に訪れた宇部の東隆寺である^{参2)}。

3 宇部東隆寺の再興

東隆寺に関する史料によると^{参3)}、当寺は1339年に厚東武実が創建し、南嶺子越禅師によって開山がなされた。その後、博多進出や長門国外護^{参4)}の必要性にかられた大内氏の勢力下に入るが、1557年に毛利元就によって大内氏が滅亡して以降は、堂や塔の跡は田畑となり、本堂がわずかに残る程度まで荒廃した。しかし1680年代(元禄期)になり当寺建立の願いが出されたことにより、毛利就直が再興をなしたとある。境内の説明書きには、建立を願い出たのは当時の禅師と地元民だったとある。

4 東隆寺現存の亀趺

今回の調査で筆者が意識的に行ったのは、墓石や碑文の創建年代を見ていくことである。これにより、その史跡の興隆した時期についてのめどを立てることができる。

東隆寺においては、墓石の年代や形態が中世期から昭和に至るまでのものが点在していたことが印象的であった。特に近世以降の墓が多く見られたが、これは元禄期の再興を示す証左となろう。

また、境内には南嶺和尚道行碑という碑文が存在する。この碑文の台座は亀を模した亀趺である。亀趺は、中国における南北朝時代、梁朝において初めて創建され、それが東アジア各国に広まったと言われている^{註1)}。山口県内においては、東光寺の毛利氏に関する石碑や萩の明倫館碑、防府の玉祖神社等に点在するとされる

*1 至誠館大学 ライフデザイン学部

参5)。日本に点在する亀趺は、先行研究においては東光寺や明倫館のもののような江戸時代を起源とするものが主流とされるため、「大明景泰五年」、すなわち創建が1454年と銘記されている南嶺和尚道行碑^{註2)}、他の亀趺に比べ創建年代が大きく遡る点で、他のものとは一線を画するものとして見なすか、もしくは碑文と亀趺における創建年代の相違を疑う必要が出てくるだろう^{註3)}。

さらに、元禄期の再興についても、当該期における毛利就直による知行地政策といった土地制度史と関連付けた考察が必要であろうと考える。1680年代には毛利就直の主導のもとで大規模な検地が行われたという点で、当地の再興を軸に毛利就直と地方勢力との関係を解明していくことは重要な作業となろう。

その後は山口市に向かい、妙見社・毛利氏墓所・瑠璃光寺・洞春寺を巡った。

5 寺の変遷—大内氏から毛利氏へ

妙見社およびその傍らに存在したとされる興隆寺は、大内氏の菩提寺として栄え、同氏が朝鮮から大蔵経を輸入し施入したとされる。そこから車で15分ほど移動し、瑠璃光寺や洞春寺といった、これまた大内氏にゆかりのある寺を訪れた。

瑠璃光寺や洞春寺は、大内氏滅亡後に毛利氏によって創建されたものなので、大内氏との直接の関係は無い。しかし、瑠璃光寺創建以前に同地に建っていた香積寺は大内義弘が14世紀に創建したものであるし、洞春寺も、その前身である国清寺は大内氏が創建したのであった。このように当地の寺々は、本来大内氏の遺構であるにも関わらず、毛利氏によって寺の遺構のうえにそのまま毛利氏に関わる寺院が置かれた点に特色を見出せる。領主の根拠地移転に伴い寺社も大きく移動する点が、山口市に存在する寺社遺構の大きな特徴であると考えられる。

この後に訪れた山口市歴史民俗資料館には、国清寺時代の木造が展示されており興味を引かれた。当地の

寺の変遷は、大内氏から毛利氏へ、さらには、新たにその地の領主となった毛利氏の統治思想を考察するうえで重要な視点となり得るのではなかろうか。

6 藩庁という用語

洞春寺から少し南に下りると、県庁近辺に出る。そこから、旧山口藩庁門・県政資料館・山口県立図書館および県文書館・山口市歴史民俗資料館を見学した。

山口藩庁門は、1863年に毛利敬親が萩から山口に拠点を移した際に創建されたという。当初は御屋形と呼ばれた館が、後に山口藩庁と呼ばれるようになったのであろう。そもそも藩庁という用語は明治維新期に多用されており、それ以前、特に18世紀以前は、幕府の公称として大名の領国を「藩」とすることは稀であった^{参6)}。したがって、この「藩庁」という用語それ自体が、幕末維新期に誕生したということを彷彿とさせるのである。

翻って、大正時代に創建された県政資料館には、近代以降の山口の歩みを語る品々が展示されていた。山口県立図書館には幕末維新期の特別資料室のほかにも県文書館が併設されており、今後この地域に関わる研究をするうえで拠点とすべきであろう場所であることが確認できた。萩に関する歴史研究を行う際には、萩だけでなく山口県立の図書館及び文書館を積極的に利用する必要がある。

7 萩、白山神社

30日は、萩市内を中心に調査を行った。

萩では、至誠館大学近くの白山神社を参ったのち萩博物館を巡検した。白山神社は、『萩市史』に拠ると、その起源は9世紀に遡るとされる^{参7)}。だが境内には起源にまつわるものは特に存在せず、18世紀後半に当たる寛政期や19世紀初頭の文化期に奉納されたとされる灯籠や狛犬が散見された。このことから、江戸時代後期において当神社が再興されたことが推測される。

宇部の東隆寺も同様に江戸時代に再興されているこ

とから、山口県内に存在する神社と江戸時代における神社の再興を共通のキーワードとして見ていくのも面白いかもしれない。

8 吉田松陰の字体と萩八景遊覧船

萩博物館では、「兄松陰と妹文」という特別展示が行われていた。見どころは、松陰が家族に宛てた直筆の手紙を多く展示しているところにあった。松陰の字体は大変端正なもので、幼少期から『孟子』に慣れ親しみ、多くの情報を漢籍から吸収していたその教養が垣間見られるようであった。

博物館を後にし、その足で萩史料館・萩八景遊覧船・萩城跡を散策した。

萩八景遊覧船には、本学が私立大学研究ブランディング事業として打ち出している「歴史的な地方観光都市における新たな観光資源開発—萩と萩八景—」を意識しつつ乗船した。

「萩八景」とは、中国の「瀟湘八景」に見立てられて名付けられた萩の名勝であるとされる。これは17世紀後半⁸⁾に藩主の毛利吉就が家臣に命じて措定させたとされ、それぞれ「中津(江)の夜雨」「玉江の秋月」「小松(江)の晩鐘」「倉江の帰帆」「上津(江)の晴嵐」「鶴江の夕照」「桜江の暮雪」「下津(江)の落雁」のように下の二文字が瀟湘八景と同様に作られているためである⁹⁾。

「八景」は日本のみならず、東アジアの多くの地域でその地の代表的な景勝がそのように称されている。名前の付け方はまちまちで、萩八景のように瀟湘八景の下の二文字を一致させたものばかりでなく、琉球の「中山八景」のように、ただその地域を顕彰するために瀟湘八景を見立てることなく「八景」としているものもある⁶⁾。

この点を踏まえ、もう一度萩八景に戻り、今度は萩八景で措定されている場所について考察する。すると、下の二文字は瀟湘八景を見立ててはいるが、上の二文字はすべて「江」すなわち「いりえ」を示しているこ

とがわかる。他の「八景」と比較すると、これは萩の「八景」の特徴であると言える。つまりここから、毛利吉就は当初、萩の「八景」を措定することを意図したのではなく、何らかの理由で萩城下を取り巻く河川の入り江を顕彰すべく、それらを「八景」として位置づけたということが推測できる⁷⁾。同時に毛利吉就は、家臣たちに「八江萩」の図巻を作らせていることから、むしろこの作成のために「萩八景」を創出させたとも考えられよう。つまり、萩八景それ自体の創出を目的としたのではなく、萩八景創出を手段として用いることで八江萩の作成を目指したと考えられるのである。この疑問に対し、一定の解答を与えてくれたのが、『八江萩(瀟城)名所図画』の存在である。

19世紀前半に盛んに行われた各所における「名所図会」編纂に連動するかたちで、萩においても『八江萩名所図画』の作成が企図される。これは、萩藩士の木梨恒充が天保五年(1834年)頃から作成を企図し出し、明治二十五年(1892年)に刊行された¹⁰⁾。この図画の見開きには、

いにしへの慶安・承応の間より八江萩八景といへる名起れり。そは鏡江・得江・菊江・柳江・藤江・萩津江・二江・三江等の名所をいふ^{引用文献1)}。

とあることから、毛利吉就が「萩八景」を選定する以前に、慶安・承応年間(1648~1654年)には別の「萩八景」が存在し、しかもそれが「八江萩八景」としてすでに入り江の景観を示すものであったことが伺える。

「新」萩八景創出については、「古」八江萩八景との関連性を念頭に置きつつ、毛利吉就の建議を史料で辿るしかない。17世紀後半において毛利吉就が、萩の城下を取り囲む河川を、引いてはそうした河川に点在する入り江をどのように捉え、そしてなぜそれらを「八景」に仕立て上げたのかを史料に即して考察することで、萩八景の成立やその存在意義について実証的に迫ることができるのではなかろうか。

遊覧船乗船に話を戻そう。河川と表裏一体である萩八景の話を期待して乗船したが、船着き場から橋本川まで出るあいだ、船頭は船上から確認できる萩市内の旧跡についての説明ばかりを充実させていた。今か今かと、船頭から発せられるであろう「萩八景」の説明を待ったが、「萩八景」という言葉が船頭の口から発せられることはついになかった。「萩八景」と銘打った遊覧船にも関わらず、萩八景を語ろうとしない船頭たちに対して一種の違和を感得したというのが正直なところであった。

9 萩城跡（志都岐山神社）

萩城は、1863年の毛利敬親による藩庁移転後から1874年（明治7年）にかけて、維持管理の困難に伴う萩内部からの動きや明治政府による解体指令などにより、その大方が解体された。建造物は解体されたものの、石垣や城地などは引き続き県が管理したため、1878年（明治11年）には萩在住者の意向により、同時に毛利の歴代藩主を祭神とする神社を建立、明治12年には志都岐山神社と称され、後に県社となったという¹¹⁾。こうした神社の建立は、『萩市史』には「旧藩主に対する町民の敬愛の情の表現」と記されている⁸⁾。

同書中において類似した表現がなされているものに、松下村塾がある。これについては、1883年（明治16年）に境二郎が、「懐旧の情に堪えず」、杉民治らに塾の保存を熱望したという⁹⁾。これらに共通しているのは、明治10年代に人々の「情」によって神社の建立や史跡の保存がなされているという点である。懐旧の念に駆られて旧跡を保存、顕彰したいという「情」ももちろん存在したであろうが、歴史学として重要なのはむしろ、実際に地元民の尽力によりなぜ旧跡の保存がなされ得たのかという点である。人々の「情」によって保存がなされた名所旧跡は、萩市内に他にも点在すると思われる。だとすれば、これらに対し人々の「情」が作用することで名所旧跡となりえた条件はどのような歴史的背景なのであろうか。

ちなみに松下村塾の保存運動後、20世紀の初頭になり同地に松陰神社が創建される。現段階ではあくまで推測に過ぎないが、当地が名所旧跡として名が知られるようになるのは、大正期になされた当地の国史跡指定や大正10年代に行われた皇太子巡幸の影響が強いのではなかろうか^{10) 11)}。

10 おわりに

以上、山口県の史跡を調査しての印象論を出ない報告ではあったが、各史跡で得た問題関心を大まかにまとめると、以下のようなになるだろう。

- ・宇部東隆寺の再興の際の、地域権力者による知行地制度や地方勢力との関係性。
- ・東隆寺の亀跌と山口県内に点在する亀跌の共通性。さらには、明や朝鮮との関係性。
- ・山口市における大内氏から毛利氏への権力者の変更とそれに伴う寺社の移転について。
- ・「萩八景」の成立事情。毛利吉就の考える萩城下と河川との、さらに「古」八江萩八景との関連性。
- ・萩市内の名所旧跡の近代史。主に、どのように名所旧跡として人々に「伝統」が伝わっていったのか。

こうした問題関心にに基づきながら、今後はそれらに関係する史料を追究して行きたい。

萩という地域を、萩だけではなく山口県のうちの一つの地域として見ることで、より大きな視点を得ることができる。同様に、山口県という領域で歴史を年代ごとに見て行くだけでも、そこから「日本史」を描き出すことができる。今回の山口県内の史跡調査を通して筆者が得られえた最大の知見は、そうしたよりマクロな視点から地域の歴史を見ていくことの重要性について認識できたことである。

〔謝辞〕

巡検の際には、移動などの際に本校職員の方々のお

世話になりました。個人名は記しませんが、ここに記してお礼申し上げます。

〔註〕

- 註1 中国発祥の後、朝鮮・日本・台湾はもちろん、ベトナムや北アジアにまで点在するという。しかし、琉球にはなぜか存在しない。
- 註2 参考文献3) に、碑文の全文が掲載されている。
- 註3 もちろん、明や朝鮮の影響などを考える必要もあるが、山口県内に亀趺が散見される点で、まずは県内における位置づけを考えるべきであるだろう。
- 註4 萩八景遊覧船のパンフレットには貞享二年(1685年)、『八江萩名所図画』には元禄の頃とある。元禄の場合は、吉就逝去するのが元禄七年であることから、1688～1694年頃と推測できる。
- 註5 ちなみに参考文献8) によると、「瀟湘八景」はそれぞれ「瀟湘夜雨」「洞庭秋月」「煙寺晚鐘」「遠浦帰帆」「山市晴嵐」「漁村夕照」「江天暮雪」「平沙落雁」である。
- 註6 「中山八景」という用語自体は15世紀の冊封使の記録にまで遡るが、場所については明らかとされており、景勝として「八景」が明確化したのは18世紀になってからである。これが19世紀の江戸に伝わり、これを手本にして葛飾北斎が「琉球八景」を描いている。なお中山八景の景勝は、「桑村竹籬」「泉崎夜月」など、地名を明らかにするものであり、瀟湘八景を見立てたものではない。そのほかにも、最近の研究では琉球の「八景」は、本来は「八景」ではなく禅寺から景勝を描いた「十境」とすべきだという指摘がある(参考文献9))。
- 註7 1897年(明治30年)には萩の風景を述べた『瀾城三十六勝記』が成立する。本書を見ると、河

- 川の景勝のほとんどが「八景」に由来するものと見て取れる。なお『瀾城三十六勝記』については、参考文献8)「瀾城三十六勝記」を参照。
- 註8 松陰神社境内には、大正期の石碑が多く点在している。その多くは皇太子巡幸を顕彰したものであるようである。
- 註9 なお、川村学園女子大学の及川祥平氏のご教示によると、明治後期に徳富蘇峰などを中心に松陰が「愛国主義者」として位置づけられ、大正期に至り修身などの教科書を通してそうした思想が広まったのだという。

〔参考文献〕

- 1) 伊藤幸司; 大内氏の琉球通交, 年報中世史研究, 28: 2003
- 2) 伊藤幸司; 大内氏の外交と博多聖福寺, 中世日本の外交と禅宗, 吉川弘文館, 2002
- 3) 宇部市史編集委員会編; 棚井村 東隆寺, 宇部市史料篇, 上, 宇部市史編集委員会, 1990
- 4) 須田牧子; 大蔵経輸入とその影響, 中世日朝関係と大内氏, 東京大学出版会, 2011。なお須田氏は、こうした流れの中で、大内氏が朝鮮より輸入した大蔵経が当寺に施入されたことを指摘している。
- 5) 平勢隆郎; 亀の碑と正統, 白帝社, 2004
- 6) 吉村雅美; 近世対外関係と「藩」意識, 近世日本の対外関係と地域意識, 清文堂, 2012。なお吉村氏によると、「藩」は幕府を外国から守るまがきというイメージで使用される用語であった。したがって外国船の来航が多い平戸藩では、18世紀後半の天明期から「藩」が多用されたとされる。
- 7) 萩市史編纂委員会編; 白山神社, 萩市史, 三, ぎょうせい, 1987
- 8) 堀川貴司; 瀟湘八景, 臨川書店, 2002
- 9) 高橋康夫; 海の「京都」, 京都大学出版会, 2015
- 10) 松本二郎; 八江萩名所図画 解題, 八江萩名所図

画 付録, マツノ書店, 1990年

- 11) 萩市史編纂委員会編; 萩城の解体, 萩市史, 二, ぎょうせい, 1989
- 12) 参考文献8)、76
- 13) 参考文献8)、161

[引用文献]

- 1) 木梨恒充・山県篤蔵; 八江萩名所図画, マツノ書店, 1990, 3